

入来花水木会の再興

入来院 久子



れられない思い出だ。

今から11年前、2010年の夏の終わり。母が代表を務める『入来花水木会』主催の「入来薪能」第7回公演が入来麓清色城跡（入来小学校・校庭）で開催され、観世流鍊仙会

の若松健史先生が人間国宝の錚々たる楽師たちを引き連れ、若松先生自ら前シテを務めてくださった「巴」の厳かな舞台を、当時私は一番後方の音響席から眺めていた。

夕暮れに城山に向かって雁が埒に飛んで帰る中、美しく響き渡る鼓や笛の音で幕を開け、だんだん闇が深くなると揺らめく篝火の中で練り広げられた幻想的な能舞台は一生忘

「入来薪能」は1999年に第1回が開催され、その時から私は母に頼まれて音響席でマイクを握り司会を担当していた。能舞台を見たのはその時が初めてで、演目の能や狂言の説明や難しい先生方のお名前を発音も含め間違えずに読み上げなければならず、普段緊張などしない私が、この時ばかりはとても緊張したのを覚えている。

鹿児島だけでなく全国から「入来薪能」を鑑賞しに入来麓に來客があり、鹿児島市内からの送迎バスも特別に手配しての大イベントの舵を取った母。私はそんな母を心から尊敬してやまない。

2010年の「入来薪能」を終えたひと月後に突然、若松先生が出血性心不全で他界され、翌年の春に後を追うように、母も不慮の

事故で逝ってしまったので、「入来薪能」は『入来花水会』もろとも自然消滅してしまった。

両親が東京在住の頃に2人の謡曲の先生でもあった若松健史先生なのだが、天国で母が若松先生と出会えていたらまた謡を習っているかもしれないと想像すれば楽しい。しかしながら、母は我が家の倉庫に眠る「入来薪能」の檜舞台のことを天国で気にしているのでは？と最近想像したりもする。

父を世話するために2017年の暮れに入来麓に移り住んだ私だが、2年ほど前からご近所に素敵なお友達もでき、麓の生活にも慣れてきた矢先に入来麓伝統的建造物群保存地区保存会の役員となり、また同期に薩摩川内市伝統的建造物群保存地区保存審議会の委員に選出されて会合に参加してみても、色々考えさせられることが浮上してしまい、どうし

ても両親の愛する入来麓を大切にしたいという意思が強くなり、今年2021年の初夏に長女の私が母の意志を引き継ぎ『入来花水会』を再興する運びとなった。

正義感と責任感は一入倍あると自負するが、なにせ子供頃から忙しかった母の代わりに家事や兄弟たちの世話をするのが第一の私の役割で勉強は二の次でよかったので、母の百分の一ほどの知識しか持ち合わせていない私である。歴史にも疎く興味も無かった私が果たして母の立ち上げた『入来花水会』を汚すことなく運営していけるのか、今更ながら不安ではあるのだが、嬉しいことに会員に名を連ねてくださった方々が皆さま素晴らしいので、きつとしっかり補佐して下さると図々しく信じている。

この世は縁だ！出会えた縁を大切に生きていけば、きつと天国の母も力を貸してくれ

るのではと、超楽観主義の私は『入来花水木会』の未来は明るいと感じて疑わない。なので、皆さま新生『入来花水木会』を何卒どうぞよろしくお願いいたします。



第7回入来薪能『巴』、2010年（平成22年）8月28日
前シテ（里女）・故若松健史氏（重要無形文化財総合指定）